



第22号
2017. 3

青少年赤十字

賛助 ひろしま

青少年赤十字賛助奉仕団信条

1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。
1. 志を同じくする人々と手を取りあい、研鑽に努める。

発行 広島県青少年赤十字賛助奉仕団
事務局 日本赤十字社広島県支部

〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64

TEL (082) 545-5011

青少年赤十字に期待するもの

日本赤十字社広島県支部事務局長

泉水 直



賛助奉仕団の皆様には、平素より青少年赤十字の普及・発展並びに赤十字事業へのご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

青少年赤十字は、児童・生徒が赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう日常生活の中での実践活動を通じて、いのちと健康を大切にする事、地域社会や世界のために奉仕すること、世界の人々との友好親善の精神を育成することなどを目的としています。

現在、広島県の青少年赤十字加盟校は三〇六校、メンバー数は八六、一九一人であり、主に学校教育の中で、校内ボランティア活動や支部主催事業への参加、校外での募金活動などその活動の幅は多岐に渡っています。また、大規模災害が頻発している昨今、避難所でも青少年の活躍を目にします。高齢者の介助、避難所の清掃など、自ら困難に「気づき」、どうすれば良いか「考え」、「実行」する姿に、青少年赤十字の「三つの態度目標」に通じるものを感じ、改めてその意義を再確認したところです。

広島県支部としては、こうした様々な青少年赤十字の活動を、県民の皆様により理解し周知していただくことにより、加盟校がますます拡大し、青少年

赤十字の輪が一層広がっていくことを願っています。また、平成28年から始まった広島・韓国青少年赤十字相互交流事業を中心とした国際理解・親善の取り組みへの一層の参画も期待しています。

こうした青少年赤十字活動を実践する期間は数年ですが、優しさや思いやりといった根底の部分は、今後生きていく上での大きな糧になるものと信じています。広島県支部としても、賛助奉仕団の皆様と密接に協力し合いながら、こうした青少年の育成を全力で支援していきたいと思っています。今後とも、青少年赤十字活動の更なる発展に向け、皆様のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成二十八年全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会総会報告

委員長 日高敬司

平成二十八年七月二・三日、日本赤十字社本社において、全国四十七都道府県委員長、日赤本社関係者六十余名が参加して開催されました。

○第一日

一 開会式、写真撮影

二 総会

①平成二十七年事業、会計・監査報告

②役員改選

③平成二十八年事業計画・予算案

④その他

- ・青少年赤十字賛助奉仕団バッジについて
- ・青少年赤十字賛助奉仕団の旗について
- ・「いとすぎ」第二二号編集について

三 全体会

本社 津村青少年係長

「青少年赤十字防災教育プログラムの現状と今後の展望について」

三 分科会

八つの班に分かれて、防災教育について研究協議した。

○第二日

一 分科会（前日の引き続き）

二 ブロック会

三 閉会式

（詳しくは、「いとすぎ」二二号をご覧ください）

平成二十八年度中・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会（高知大会）報告

幹事 寺田宣文

中・四国の賛助奉仕団活動の活性化をめざして交流を深め、課題解決の研修とお互いの親睦を図ることを趣旨とする当研修会が十月十三日・十四日、高知市で開催された。九県から三十一名の団員と、高知県支部職員五名のうち、広島からは六名の団員が参加した。

第一日（高知会館）・・・講演会とグループ協議

- ① 賛助奉仕団の活性化
- ② 防災教育への取り組み
- ③ 青少年赤十字への加盟促進
- ④ 他の奉仕団との連携

どのテーマも緊急の課題であることがあらためて明らかにされたように思う。団員の高齢化が進み、研修や行事への参加者が減っている現状を打開するために、何をするかを明確にし、団員が活動する場を作ること、団員が、ライフワークとして地域奉仕団の中で青少年赤十字活動を紹介していくこと、学校訪問を積極的に行うことなどが出された。加盟校への「いとすぎ」植樹活動は各県で試みがなされており、学校の児童生徒へのインパクトが大きいことも報告された。

防災教育の重要性については、二日目の学校訪問と高知市内の探索で痛感したことである。

第二日（学校訪問）

二日目は、二校の小中学校視察訪問と龍馬記念館を訪れたが、移動中驚いたのは、市内いたるところに「地震時避難経路」や、「津波到達点高さ〇〇m」の看板表示がなされていることだった。また、海岸線の防潮堤や避難タワーの建設が急ピッチで行われていると聞いた。

まさに現実味を帯びた南海トラフによる大地震と大津波を想定してのものである。訪問した「潮江中学校」では、地域との連携による防災教育で、生徒の防災意識の高揚に努めている。生徒自らの応急手

当の実践や地域での積極的な活動を学んでいる。校内にも町内会の防災拠点が置かれ、いたるところ防災揭示物が貼り出されている。なんと、校庭に避難救助艇が置かれていた。

今回の研修で、各県共通する課題が多い中、積極的な取り組みがなされていることがわかった。それにも増して、高知市で見聞きしたことは、広島県から参加した自分にとって非常に大きな驚きであった。

平成二十八年度広島県青少年赤十字賛助奉仕団総会報告

幹事 采谷宣子

今年度の総会は、四月二十二日午前十時から日赤県支部において開催しました。

- 一 平成二十七年事業及び会計報告について
会計監査は四月四日午前十時から日赤県支部にて行った。同日役員会で承認を得た後、今年度の事業計画及び予算について審議を行った。
- 二 平成二十八年度事業計画及び予算について承認されました。
- 三 新入団員について

総会時に、川本和暁先生、遠藤佳男先生、下野鈴子先生の三名が新しく新しく仲間に加わってくださり、活気づいています。

四 親睦を深めるため旅行を取り入れ、中四国ブロック大会へできるだけ多く参加することを申し合わ

せました。

五 本年度団費は全て完納済みです。

五 各種大会・研究会へ参加する

夏のトレニングセンター，指導者協議会，県大会，県支部の行う研修会へ積極的に参加することを申し合わせました。

「いとすぎプロジェクト」について

委員長 日高敬司

ソルフェリーノの丘のいとすぎを県内加盟校に配布するという計画については，既に報告しているとおります。

今年度は広島市立五日市南中学校に寄贈することとし，五月九日賛助団員有志が出席し植樹しました。この日は当校の登録式があり団員も来賓で参加させて頂きました。赤十字社のあいさつは山中章敬副委員長が行いました。

いとすぎの種の発芽は大変難しいため，県立西条農業高校に依頼しております。ある程度の大ききになれば，団員が引き取り植樹に適するまで育てその後学校に寄贈することとしております。

国際人道法について（一）

国際人道法は人間を守る盾となりうるか

日本赤十字国際人道研究センター

（日本赤十字広島看護大学）

研究員 角田敦彦

二〇一七年一月二十日、ドナルド・トランプ氏が第45代アメリカ合衆国大統領に就任した。彼は大統領選挙期間中、不法移民の根絶を訴え、隣国との国境に“Great Wall”と呼ぶ長大な壁を建設することを公約に掲げた。

一九八八年にベルリンの壁が崩壊して以来、世界では欧州連合（EU）の設立など隣り合う国との敷居を低くした共存・共栄の動きが活発となったが、米国の同時多発テロや過激思想にもとづく武装集団の国境を越えたテロや残虐行為を経験し、一部の国では融和から一転して内国的な政策に転じ、自ら打ち壊した壁を皮肉にも再び築こうとしている。

もちろんこれらの政策転換には、自国民の安全確保や不法移民によって奪われた国内の雇用を取り戻すといった別の大儀もあるようだが、世界各地でテロリストが移民や難民に紛れて入国し様々な騒憂を招いている事実も、これを後押しする要因のひとつであろう。

さて、本稿の主題である国際人道法（以下、「人道法」）は、戦争や紛争犠牲者保護を目的とするジュネーブ諸条約等法規慣習の総称であり、人道法という特定の法律や条約が存在するわけではない。さらにジュネーブ条約だけをみても、「20世紀後半に当初わずかの条文からなる「赤十字条約（規約ともいう）」として誕生し、その後一五〇年以上の間に80

0条を超える条約に発展している。換言すると、人道法は慣習法として長年にわたり積み上げられた人間の知恵であり、条文の規定に関わらず人道の精神に基づく慣行によって我々の行動に法的な制限を加えるものともいえる。

武力衝突やテロ行為によって、戦闘員以外の一般市民が無差別に標的とされる今日、人間対人間の法として、「戦いの中にも慈悲を（Inter Arma Caritas）」を訴える人道法の重要性はますます高まっているといえる。人道法ではこのほかにも不必要な苦痛を与えることを禁じる「均衡性」の原則により、戦争などの極限の状況下でさえ、その手段に一定の制限を課している。

広島がかつて経験した核兵器の惨禍は、大量破壊兵器による無差別殺人として人類の歴史に深く刻まれているが、その一方で核兵器その他の武力を抑止力とする考え方があることも事実である。

ビスマルクは「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」といった。はたして人間のいのちや尊厳を守るのは武器や壁による抑止なのか、それとも人道という人間の知恵なのか、我々は歴史と経験の両方から学ぶ時にきている。

気づき・考え・実行」できる生徒の育成を意識した学校経営

生徒たちが学校づくりに参画する学校を目指して

広島市立五日市南中学校長 藤川要三 (広島県青少年赤十字指導者協議会長)

本校は、私が赴任した平成二五年にはすでにJRC加盟校であった。しかし、その活動はほとんど行われていなかった。

私がJRC旗を持つて廊下を歩いていると、ある生徒が「校長先生、その旗は何という旗ですか」と質問をするという有様であった。また、当時は問題行動が多発し、広島県「小・中学校生徒指導集対策指定校」の指定を受け多くの対策に取り組み日々であった。こうした状態ではいくら生徒たちに力があっても、安心して勉強したり部活動に取り組むことは難しい。

頑張りたい生徒が頑張れる学校をつくるためにも、学校改革が必要であると考えた私は、JRC活動の態度目標である「気づき・考え・実行」できる生徒の育成を平成二六年度の学校経営目標に掲げ取り組むことにした。

本校は、チャイムのない学校としても歴史もち、全国的にも有名である。そこで、「無」を柱として改革を行った。「無」の改革を通して、気づき・考え・実行できる生徒を育成していく。

具体的取組内容

その一 無言集合と黙想

○無言集合

体育館での全校朝会や生徒会朝会は、多くの生徒たちの私語の中で始まり私語で終わるという状態であ

った。これでは生徒たちに付く力もつかない。

そこで教室から体育館までの移動集合を無言ですることにした。開始に当たっては、問題行動の多い現状の中では難しいのではという声もあったが、思い切って実施することにした。

○黙想

司会者の「今から学校朝会を始めます。正座・黙想」のかけ声がかかると同時に、生徒たちは一斉に目を閉じ一〇秒間黙想を行う。教室から体育館そして朝会が開始されるまでの無言集合及び正座黙想は多大な効果があり、その後は整然とした中で朝会が実施できている。

その二

○無言清掃

授業終了後、トイレ休憩を済ませた生徒たちは、清掃開始の音楽が流れ始めると無言で各清掃場所に移動し無言清掃を始める。最初は自分の担当場所だけしていた生徒も担当場所以外の清掃も行うようになった。また、シンデレラ拭きは我が校の伝統になりつつある。

「気づき・考え・実行」を学校教育目標に掲げて今年で四年目、その成果は驚くべきものがある。

平成二八年・二九年と全国学力・学習状況調査の結果を見ると、国語と問題・数学と問題の平均得点は全国・広島県を上回り、県内有数進学校への合格者も増加した。

生活面でも、問題行動件数0を達成できている。また、部活動においても全国大会や中国大会に多く

の部が出場を果たすことができた。

私は「気づき・考え・実行」を学校教育目標に掲げ実践し、大きな成果が得られていることに深い喜びを感じている。

マンネリからの脱却と温故知新

顧問 横田二郎

「青少年赤十字展」を、今年度も例年どおり十一月五・六日の両日、東広島運動公園体育館において、開催の「東広島市生涯学習フェスティバル」に協賛して実施しました。私の視覚障害のため準備が少しおくれましたが、東広島市教育委員会・日赤県支部・赤十字血液センター等のご支援とJRC加盟校のご協力により、滞りなく実施、一応の成果をあげることができました。

今年度は、近年の掲示型の展示内容に止まらず、一般の方々と共に体験のできるものと考え、少しだが「災害時に知って役立つ技術」と「平和を願って折り鶴再生紙を使つての折りパラづくり」を試行してみました。

マンネリ脱却にはほど遠いことですが、試行しての意義はあったかと思っています。今後一層催事内容を再検討を行いたいものと思っていますが、来年度、フェスティバル自体が、開催時期・会場を変更されるので、それに対応して計画を根本的に見直す必要もあり、マンネリ脱却の好機となっています。

奇しくも、何度初めに奉仕団委員長から「賛助奉仕団もマンネリ化して」「今年あたり新しくなくては」とのメッセージをいただき、思いを一にしていることを知りました。

『広辞苑』の言辭を借りれば、「マンネリ」とは一定の技法や形式を反復慣用し、固定化した型にはまって獨創性や新鮮さを失うようになる傾向であり、これに陥らないにはどうすればよいか。

ここで、私は「温故知新」ということを想起しています。昔の物事を研究し吟味して、そこから新しい知識や見解を得ることです。

組織にあつて、具体的にはどのようなことが考えられるか。「組織の活動史の回顧」「組織人による回顧誌」「組織人による回顧座談会」「他県の活動史閲覧」等が浮かんできましたが、「温故知新」だけがマンネリからの脱却の方法ではないので、広く多くの人々から知恵を出しあっていただくことが大切かと思えます。

米寿を迎えての今、頻りに、もう十年若ければとの想いをしながら書き終えました。 合掌

「第四〇回全国高等学校総合文化祭（総文祭）JRC・ボランティア部門大会（広島大会）を終えて

実行委員長（広島県立宮島工業高校教諭） 近藤明弘

大会では、「お互いに認め合い支え合う社会づくりのために」という昨年度の茨城大会のテーマを引き継ぎながら、「ボランティア活動の原点に立ち返り、今後の活動を考える」ことをテーマとしました。相手が何を望んでいるのかを考えながら、時には相手に確認しながら活動することの大切さや、自分の行動が自己満足になっていないか考える機会とするために、講演会やフィールドワークをプログラムに設け、実際に参加し、話を聞くことで、その体験から学んだことを発表し今後の活動の充実を図るものとなりました。

また、開催地は世界で最初の被爆地「ひろしま」です。核兵器のない平和な世界を実現するためには、次の時代を担う若い世代に被爆体験を正しく継承し、平和意識の高揚を図るために、被爆の実相を伝え続けなければなりません。しかし、被爆から七〇年が経過し、戦争や被爆体験者が減り、その継承が大きな課題になっています。数少ない「語り部」から話を伺うことで、私たちに何ができるのかを考え行動していただけることを訴えかけることが、「ひろしま」の果たす役割であり義務であるとも考え、大会は開催されました。

ボランティア部門は、毎年開催される「全国高等学校総合文化祭」において協賛部門とされており、開催されない（前回大会の滋賀県では未開催）年もあります。4年前に広島での全国大会開催が決まり、同時にボランティア部門の開催も決定されました。

これを受け「ボランティア専門部（翌年「JRC・

ボランティア専門部」に改称）」が設立されました。校内にJRC部（同好会を含む）を持つクラブ顧問が中心となり、運営を担当することとなりましたが、その中に、過去の全国総文祭部門大会に参加経験を持つものが皆無で、長崎県大会、茨城県大会の視察を経て、手探りの中、昨年度プレ大会を実施しなければならぬと、本県ならば、本番を見据えての大会運営となるべきところでしたが、予算の都合上、全てのプログラムを実施することができず、大会として成立しているとは、お世辞にも言えるものではありませんでした。

不安と焦りが交錯する中、本大会は、開催県広島を含む、全国二一県から五七校、総勢二三四名の参加者を集めて開催の運びとなりました。そのような状況ではありましたが、大会期間中は、メイン会場の日本赤十字広島看護大学をはじめとする、関係各所のお力添えをいただき、スタッフ一丸となり運営することができました。特に、ここに関わった生徒たちが大きく成長してくれたことが何よりの成果であったと強く感じています。

二〇一六 全国高等学校総合文化祭広島大会「JRC・ボランティア部門」に参加して

副委員長 野田 崇

二〇一六全国高等学校総合文化祭広島大会「JRC

C・ボランティア部門」は、八月一日～三日の間二
一都道府県から五七校約二三四名が参加して広島赤
十字看護大学で開催されました。

六月中旬「JRC・ボランティア部門」事務局か
ら「閉会式の日には、講評をお願いしたい」と要請を
受けました。少し迷いましたが、スタディセンター
のスタッフを伴にした先生方と再会できるので参加
を予定していましたので引き受けることにしました。

JRC・ボランティア部門の今年のテーマは、
「ボランティア活動の原点に立ち返り、今後の活動
を考える」でした。被爆から七一年目の広島で開催
する総文祭です、平和とボランティアを考察する大
会であってほしいと思っていました。

一日一二時 開会 特別講演は、NPO法人国際
地雷処理・地域復興支援の会理事長・高山良二さん
により、カンボジアにおける地雷処理活動について、
二〇〇二年から現在に至る報告と提案を受けました。

活動報告は、一三県一八校が多様な取組みを発表
しました。広島県の磐城第一女子高から「今、伝え
たいこと」として、三・一一東日本大震災後の現
状報告があり、続いて「忘れていないよ。わたした
ちの課題だよ」と六県から提案がありました。とて
も心強かったです。また生徒たちは地域ボランティ
ア活動・障がい者支援介助・地球温暖化・発展途上
国援助などの拡がりがあり、多様な感性を感じまし
た。

その後、原爆資料館元館長畑口（最後の被爆者館
長）さんの特別講演を聞き広島原爆体験を共通理解

しました。

二日、A「平和公園～日本赤十字社広島血液セン
ター」 B「障がいを持つ子どもと遊びをとおして
理解しあう」 C「広島観光ガイドボランティア」
D「防災・減災について考える」の四班分かれてフィ
ールドワークに行きました。

わたしは、D班「防災・減災について考える」に
同行し、国土交通省国土地理院中国地方測量部で
「地図や地理空間の活用」「ハザードマップの学習・
避難経路の確認」の研修の後 八・二〇広島豪雨土
砂災害現場を訪れ、被災地域の取組み、砂防ダム工
事・被災者の取組み・復興の現状等を学びました。
見学の後、国土地理院へ戻り、フィールドワークの
発表準備と作業をしました。

三日（最終日）はフィールドワークの発表を行
いました。各班工夫を凝らし高校生の感性を生かした
発表を行い成果を報告しました。

最後に、わたしの講評です。JRC・ボランティ
ア部門の今年のテーマは、「ボランティア活動の原
点に立ち返り、今後の活動を考える」ですから、
「ボランティア活動の原点」についてわたしの考え
ている「命と向き合う」「ニーズ・視点の多様性」
「高校生の気づきと感性」「人道的価値観」を解説
し、活動報告やFW発表・展示による活動発表の講
評をしました。広島県の磐城第一女子高から「今、
伝えたいこと」として、三・一一東日本大震災後
の現状報告に対して「忘れていないよ。わたしたち
の課題だよ」と六県から報告は、防災教育を課題と

する赤十字の取組みの原点だけに、今後の拡がり
と深化を期待できることを話しました。

高校生が、地域・障がい者などの身近な気づき・
行動をより進化させ、寄り添ボランティア・サービ
ス（VS）を読みとれました。更に、地球温暖化・
発展途上国援助など国際的ニーズに対してカーボン・
オフセットやフェアトレードを企画し高校生に出
来る国際活動の視点と行動を報告した愛知県の南陽
高校の取組みは、今後のご覧ボランティア活動の可能性
の拡がり視点の確かさに好感を持ちました。

要は参加者の数ではなく「JRC・ボランティア
部門」への参加に意欲的に取り組んでこられた参加
者に、敬意を表したいと思います。

広島県「熊野町赤十字祭り」に参加 して

副委員長 河戸 靖子

安芸郡熊野町民会館で開催される「熊野町赤十字
祭り」は、今年で十周年を迎えた。町内すべての小
学校と保育園・中学・高校がJRCに加盟していま
す。参加者は保育園児から高校生までが中心となり、
大学生や女性奉仕団員、一般の方もボランティアと
して参加し、資料は二百五十人分が用意された。

この祭りの主催者は、町の青少年赤十字連絡協
会であり、学校や社会福祉協議会も深くかかわって
いる。会長は町長である。

女性奉仕団の方は、幼児も食べるからということ
で、前日から甘口のカレーを煮込んでくださっている。
私たち賛助奉仕団も、お手伝いに有志が十年前
から参加している。赤十字広島県支部は、早朝より
直径1mもある大鍋を持ち込んで、ハイゼックス袋
によるご飯炊きの準備し、熊野町のマスコット「筆
リンちゃん」も園児に囲まれて握手、握手・
開会式。進行係は高校生。「空は世界へ」を全員
で歌う中、旗の掲揚。そして、三村町長の開会のあ
いさつ、来賓の林教育長、赤十字県支部組織振興課
佐々木課長のお祝いの言葉がありました。

第一部 館内フィールドワーク。

これは参加者の楽しみでもあり、工夫がこらされて
いる。フィールドワークの班編成は各班ともに保育
園児から中学生までがいっしょになり、協力し合っ
て難関を突破するようになっていく。数年前中学生
が園児を背負ったり、泣く子を抱っこして進んでい
たりした。その園児が今では中学生になり、小さい
子をしっかり世話している。関門の一つの「協力の
国」では、各自がハイゼックス袋によるご飯を作る。
お米に水を正しく注ぎ、輪ゴムをしっかりかけるの
も協力しないとできない。そして、「赤十字の国」
「健康の国」へと進み、「防災の国」では、被災時
に役立つ新聞スリッパを作る。「家族に教えてあげ
る。」と持ってきたカバンへ入れる子どもたち。微
笑ましい光景が随所にみられる。終わりに表彰式
があった。

第二部、防災についての学習。小中学生と園児と

の二班に分かれて実施しました。小中学生は防災知
識を体験的に学ぶ「家まですぐろく」。園児は災害
時の協力の大切さを基本にした「お楽しみ番組」。
これは私が指導しました。それぞれに一般の方や教
師も参加されました。

閉会式。今度は中学生が進行して、高校生は小さ
い子供たちの中に入りエスコートしている。

熊野町青少年赤十字連絡協議会長平岡弘資（熊野
第三小学校長）の次年度再会を約しての挨拶で終わ
った。参加者全員の熱意のこもった「熊野町赤十字祭
り」は終わった。赤十字社が準備し、フィールドワ
ークで子どもたちが作ったハイゼックス袋のご飯に、
これまた、女性奉仕団員の手による煮込みカレーを
かけてもらっていた。また、
十年間、毎年、内容に変化を付けて準備し、多く
の人の参加を促し、会を進めてくださった熊野町指
導者連絡協議会長様をはじめ、今までかわってこ
られた方々に感謝を申し上げるものである。

青少年赤十字登録式に出席して

副委員長 山中章敬

今年度は、中学校の青少年赤十字加盟校八校（海
田西、海田、府中、五月が丘、坂、観音、四季が丘、
五日市南）の登録式に参加させていただきました。
ほとんどの学校で、新入生が青少年赤十字を知る
初めての機会が登録式であることを考えてつぎのよ

うなプログラムが作られています。

登録式次第

開会のことば

空は世界へ

生徒代表のことば

日本赤十字社講師の話（賛助奉仕団）

一年生誓いのことば

署名・バッジの授与

閉会のことば

生徒代表の言葉は、その学校で生徒会中心に取り
組まれている活動を紹介されています。あいさつ運
動や無言集合、無言清掃、クリンキャンペーン、プ
ルタブ集め、募金活動など、その学校での特色のあ
るさまざまな活動が紹介されています。また、生徒
会の青少年赤十字活動に対する意気込みが見られま
す。

生徒代表の話のあと、賛助奉仕団の私の出番です。
生徒代表の言葉を受けて、青少年赤十字をさらに理
解してもらうために話をさせていただきます。赤十
字について、赤十字の歴史と精神、青少年赤十字の
実践目標（健康安全、奉仕、国際理解親善）、とし
て、「気づき、考え、実行する」という態度目標に
ついて話をします。

青少年赤十字の一員としての心構え、あいさつ運動
など身の回りのちょっとした活動などを話し、まず
身の回りから、班で、クラスで、学校で、困った人

がないか、さらにはより良い学校生活をおくるにはどのようなしたらよいか「気づき、考え、実行」できる人になろうと話をしました。

「周りのことなど考えもなかったが、今日からは、いままで取り組んで来られた先輩に負けないよう青少年赤十字の一員であることを意識して生活してきます。」という生徒の言葉に、今年も元気づけられました。

地域における自主防災活動

幹事 寺田 宣文

世羅町大田地域内にある有美地区振興会が、私が住んでいるところです。各地域へ自主防災組織を立ち上げ自主運営していく取り組みは数年前から呼びかけられていましたが、世羅町内では危機感が薄く組織率が上がりませんでした。有美地区振興会で立ち上げるようになったきっかけは、2年半前の七月の長雨で、二か所で裏山が崩れたことでした。

平成二十七年に設立、初年度は、世羅町主催の自主防災講座や大田地区自治センター独自の講習会へ役員で参加しました。そこで、世羅町は県内でも屈指の風化花崗岩台地で、今まで大きな災害がなかったが崩壊の危険度が蓄積されている事を知りました。さらに、世羅町ハザードマップを見ると有美地区全体が土砂災害危険箇所、一部特別警戒区域に色取られていました。今思えば、自主防災立ち上げは緊急

を要していたのです。

講習会で学んだ知識や資料を地域内の皆さんへ提示しての机上防災訓練、そして「経験したことのない大雨、その時どうする」と題しての避難訓練を実施しました。町からの助成で、集会所内に防災設備を置くことができました。今までに、防災講演会、炊き出し訓練、救命救急講習、火災訓練をやっています。各戸には、災害対応マニュアル、緊急連絡網、ハザードマップの地域版、班別の避難経路や要支援者補助、家族歴書等を貼り出してもらっています。

地域防災活動で、皆さんに呼び掛けていることは、赤十字の理念である「みんな人間同士」「苦しみを分かち合いともに助け合って生きていく」といった地域社会ということです。また、人任せでなく、「気づき・考え・実行する」のもと、主体的に行動することです。私自身、県支部でのボランティア講習や豊富な資料・教本が非常に役立っています。

悩みは、日中の住民が半数になり、子どもは保育園・学校へ大人は職場にいて、地域にいるのは年寄りばかりという現状です。人任せでなく、お年寄りといえども主体性が求められます。有美地域は山間の集落ですが、五〇〇メートルも下れば世羅町の中心である大田地区です。避難場所も、一次避難の有美集会所から二次場所である自治センターや世羅小学校まで一キロメートル以内の好位置にあります。

今後の活動としては、隣接の振興会との合同の防災活動を計画していきたいと思っています。これか

らも地域と共に歩む防災活動をめざしていきたいと思えます

平成二十六年青少年赤十字加盟概況（加盟校数・加盟率）

平成二十八年年度広島県賛助奉仕団役員

委員長	日高 敬司
副委員長	大木 昭
	河戸 靖子
	野田 崇
	山中 章敬
幹事	采谷 宣子
	寺田 宣文
	吉丸 朝美
監事	恵美 勇作
	射場利久男
顧問	蔭山 龍児
	光本 凉子
	曾山 和彦
	田中 博
	塚本 晃史
	平越 幸男

水野 善親
横田 二郎

編集後記

今年度は、高知県で中四国ブロック大会が開催され、六名が参加しました。協議会での意見交換や市内の中学校を見学し、そのJRC活動発表により刺激を一杯もらいました。

また、今年度総会においては、新しく本会に入団された方が三名あり、いずれの方も学校でJRC活動に深く関わり活動されてきた方で、やる気満々、本会も活気づいております。これからも団員の結束をはかり、いとすぎの苗を学校に植樹する活動や、学校訪問など、赤十字活動の啓発に邁進したいと思います。同時に、皆様の活動は機関紙を通してお伝えしてゆきますので、原稿をお寄せくださるようお願いいたします。

○編集委員

曾山和彦、日高敬司、河戸靖子、野田崇、
采谷宣子、寺田宣文